

## レーモン・ジャン「記念写真」(1980)再読

杉山 毅

### 1. 再読の契機

早いもので、2001年の<9・11>から1年以上の時間が経過した。本稿が活字になる頃には、どこかでアフガン進攻とは違った別の反テロと称する軍事行動が、米国によって遂行されているかもしれない。ともあれ、<9・11>を境として米国は、反テロリズムを軸とした国際秩序の再編に乗り出し、多くの国がそれに追随している。ことの是非は別として、「いまやアメリカから発せられる意味が世界を一元的に支配して、それに対する『雑音』は『テロ』と名指されて軍事力で潰されていく。それが世界の構造になってきた」(高橋哲哉『世界』、2002年9月号)、と言っても過言ではなさそうである。

しかし、当然のことながら、そういう米国の姿勢が問われている。例えば「巨大な建物の倒壊によって現出した黙示録のような光景が、実はここだけの悲惨ではなく、それまでアメリカ国家が世界の各地に生み出し続け、かつ多くのアメリカ人が見ようとしなかったものだということには、アメリカ政府が言及しないのはもちろん、メディアもまったく思いいたろうとはしなかった」(西谷修)といった言説が、その1例であろう(藤原帰一編『テロ後、世界はどう変わったか』、岩波新書、30頁)。

より具体的に言えば、「テロリズムの問題が国際政治の焦点となればなるほど、これまで“裏の歴史”として扱われてきたCIAを中心とする米国の非公式活動の諸問題が正面から問われざるを得なく」なり、「例えば、コソボ問題において米国が支援したコソボ解放軍というテロ組織とアルカイダとの『同盟』関係の存在が明らかになるに伴い、米国のユーゴ空爆とは一体何であったかが根底から問い直され」ている(豊下梢彦「私の視点」、『朝日』、2002年1月6日)、ということになる。

米国が問われているのは、コソボ問題のみではない。イランのパーレビ政権崩壊後の米国の対中東政策も同様である。「敵の敵は味方」という単純な論理で進められたかに見えるCIAの活動が、イランの東西の隣国を「世界の火薬庫」「劣質なテロリズムの温床」と化してしまった。さ

らに言えば、同じ『朝日』の「回顧 2001 年論壇」（中島鉄郎，2001 年 12 月 12 日）には、次のような記述がある。「9 月 11 日だった。意を決した数人のパイロットによって異常な針路をとった飛行機が、彼らの憎む政治体制のシンボルを壊滅すべく、大都市の中心部に向けて突進した。瞬時の爆発、四方に飛び散る破片……。これは『ル・モンド・ディプロマティック』誌の編集長ラモネ氏が、同年 10 月号に掲載した論文「『敵』の出現」の冒頭の文章である。一読したところ、これはニューヨークの事件を思わせるが、実はそうではなく、「1973 年 9 月 11 日、チリのサンティアゴで、ピノチェト将軍がアジェンダ社会主義政権にクーデタを起こし、空軍が大統領官邸を攻撃した時の様子」であり、「米軍の後押しで、長い抑圧的な軍事政権が始まった日」の描写であった。「論壇回顧」の筆者は、次のように書き加えている。「書き手の意図は明白だ。9・11 は NY だけで起きたのではない。28 年前、サンティアゴにもあった。世界には米国が関与した無数の 9・11 があったかもしれない。それを米国自身が知らないだけなのだ、と」。蛇足ながら、われわれとしても、その近・現代史においてわが国が関与した 9・11 がなかったのか、検討してみる必要はあるだろう。

1970 年 9 月の大統領選挙に、「人民連合」（UP）の候補者として立候補し当選したアジェンダの登場は、民主的な選挙による初の社会主義政権の誕生として、世界の注目を集めた。しかし、彼が倒された経緯については、手元の情報事典にも、「CIA はピノチェトのクーデタを後押しし、民主的に選出されたアジェンダを退陣させるため、〔政府から〕特別予算を得ていた」という記述があり、さらにこの〈9・11〉の結果、アジェンダは自ら命を絶ち、「その後、何千人ものチリ国民が軍により殺害され、行方不明者 3,000 人、政治囚 8 万人と推定されている」と記載されている（『データ・アトラス'95-'96』、同朋社出版）。（これらの数字は概数で、やや正確とは言いがたいが、因みにニューヨークの〈9・11〉の正式の犠牲者数は、『朝日』、2002 年 9 月 12 日付けによれば、2,801 名。ワシントン、ペンシルベニア州のそれを含めれば 3,025 名である。）ピノチェト政権下の圧政については、ガルシア・マルケスの『戒厳令下チリ潜入記』（岩波新書、'85）を一読するだけでも、およその推測は可能であろう。

ところで、ニューヨークの〈9・11〉をサンティアゴのそれと対比するという視点は、同時に、20 年以上も前に書かれた 1 篇の小説を想起させる

ことにもつながっていた。それがレーモン・ジャンの小説『記念写真』(Photo souvenir, Seuil, 1980)なのである。何故なら、この作品が73年9月のチリの軍事クーデタに始まり、75年4月末のサイゴン陥落に到るまでの、ひとりのジャーナリストの足跡を描いたものだったからである。

この作品の想起は、必然的に、83年秋、初めて日本を訪問した作者レーモン・ジャンその人の回想にもつながっていた。彼は、この時フランス政府派遣の文化使節として来日し、日本フランス語フランス文学会大会を始めいくつかの大学で講演を依頼されていた。広島大学でも、彼を招いてヌボー・ロマンに関する講演会を開いた。この講演会を軸とし広島に2日を過ごした彼は、その印象記を自伝的エッセー『美しい光よ、いとしい理性よ』(Belle clarté Chère raison, Desclée de Brouwer, 1985, 50~54頁)に収めている。それを紹介した筆者の文章(『歯車』39, 40号, 1989~90)もあるが、それはそれとして、この短い広島滞在中、筆者が、3年前に公刊された彼の長編小説『記念写真』について訊ねると、彼としては多くを語らず、作者としては全力投球をした作品なのだが、反響が少なく、とだけ苦笑しながら答えていた。彼が全力投球をした、とはどういう意味なのか。にもかかわらず、読者の反響を呼ばなかったのは、何故だろうか。

## II. 小説の背景

まず、この小説の冒頭の文章を紹介しておこう。

彼は振り返った。2人か3人の若い娼婦たちが屋根のついた小さな回廊のアーケイドの下の暗がりの中を、煙草を交換しながら行ったり来たりしていた。この時、彼女たちが指から指へ、口から口へ手渡していた煙草の赤いおき火が見えていた。煙草にこと欠いていたので、彼女たちはこんな手立てに頼らざるをえなかったのだ。娼婦の中のひとりが彼に近づいて来ていた。彼女は物乞いをするかのように、片方の手を差し出し、もうひとつの手で煙草を口に運ぶ仕草をして見せた。男はポケットからゴーロワーズのケースを取り出して、そしてその1本を差し出した。女はそれを眺め、うさん臭そうにいじくっていた。おそらくゴーロワーズを知らなかったので、困惑していたのであろう。(P S [=Photo souvenir] . 9頁)

この小説は、9章から成る。ある1章を除き、32～48頁から成るそれぞれの章は、さらにいくつかの節によって構成されている。詳しくは後述することになるが、章にはすべて女性の名が冠せられている。他方、節には表題のあるものと、ないものがある。この冒頭の節には表題があり、それは「Les rues de Santiago, le 9 septembre à huit heures du soir」と記されていて、この小説の物語が開始する時間と場所が、第1章第1節の表題によって明示されている。ただし、作者はとくに数字を付しているわけではないので、正確には最初の章の最初の節と言うべきかもしれないが。

小説本体の冒頭は、上掲の文章に見られるように、「彼」という代名詞で始まる。「語り手」による3人称小説の形式である。小説を読み進めていくと、「彼」がこの物語の主人公であることが判明する仕組みになっているが、冒頭では、客を求めているらしい娼婦たちと、無名の一人の男＝「彼」との出会いが描かれている。場所は、第1節の表題が示すように、「南米チリの首都サンティアゴの路上」、時は、いまから29年前の、ニューヨークで同時多発テロが発生した日と同じく9・11にクーデタを迎える、その2日前、「9月9日の夜、8時」という設定である。

「彼」は、いったんは娼婦たちから離れ、友人の建築家をそのアパートに訪問するが、不在のため帰路につく。その時、ひとりの若い女性と乗り合わせたビルの昇降機が、原因不明の事故で止まる。数10分後、事故は収まるが、2人はこれを奇縁に名乗り合う。男はフィリップ・レーマン、47歳、左翼を自認するAFPの記者。10日程前からこの国の現状報告のためサンティアゴに滞在中。女はリディア・シャベス、30歳、アジェンデ政権の某官房で秘書を務めている。フランス語に堪能。5月革命の時期にフランスに滞在した経験をもつ。意気投合した2人は、その夜の大半を、「人民連合」政権を支持する若者たちが集う民芸喫茶で過ごし、この国の現状と未来を話し合う。翌9月10日、フィリップはリディアの案内で、首都に隣接する軍港バルパライソを訪れる。ここは「人民連合」政権樹立後、駐仏大使を務め、ノーベル文学賞も受賞した詩人パブロ・ネルーダの生地でもある。この軍港の動静には不穏なものが看取された。それぞれに不安を抱きつつ、2人は港を見下ろすこの町の高みに立つ。同行した人たちのひとりが、何枚かの写真を撮っていた。翌11日早朝、

フィリップは次の探訪地ブラジルに向けて、サンティアゴ空港をあとにする。

フィリップがサンティアゴの軍事クーデタを知るのは、ブエノス・アイレスで乗り換えた彼が、サンパウロに向かう機中のことであった。それ故、この小説の中で語られるサンティアゴの軍事クーデタの詳細は、主人公フィリップが手にする現地の新聞記事や、リディアの消息を案じた彼が問い合わせたチリの友人たちから、あるいはサンティアゴのフランス大使館から、彼にもたらされた情報などが主であって、事件の渦中であって（あるいは巻き込まれて）、生々しくその体験を語るということではない。いずれにせよ、左翼に希望を託してきたこの主人公としては、アジェンデ政権打倒を目指す暴力行為を是認することはできない。加えて、2日前からの付き合いとはいえ、少なからぬ好感を抱いて別れたばかりの、若い知的な女性の安否も彼の脳裏から離れることはない。そうした不安と焦燥に駆られる主人公の姿が、冷静な筆致で丹念に描かれている。

この地で、彼は旧知のアメリカ人記者ジョン・テルバックと再会する。この記者は純情なマルキストでアルコール依存症ながら、何事にも一言をもつ面白い人物として描かれている。この時サンパウロで「トロント・イヴニング・スター」の特派員として、国際環境会議を取材中。その彼にも、サンティアゴで起こった事件について、アジェンデやネルゲに対する自由な批判を交えたその独自の見解を、作者は存分に語らせている。

多言を費やすまでもなく、小説のシノプシスを語ることは本稿の直接の目的ではないので、こゝらで小説の筋を追うことをいったん中断し、本章の主旨に戻り、ピノチェトの軍事クーデタ以後、この作品の中に登場する主な政治的・歴史的事件に言及することにしたい。

1974年5月に行われたフランス大統領選挙では、ジスカル・デスタンが僅差で社会党のミッテランを破った。新聞紙上でも「共和国大統領に選出されたジスカル・デスタン氏は、フランス本国内において、フランソワ・ミッテラン氏の49.33%に対し、50.66%の得票を得た」（『ル・モンド』、1974年5月21日）と第一面で報道されている。この結果を見る前に、熾烈な選挙戦が行われていたのだが、この小説の中では、4月25日、ポルト・ド・ヴェルサイユ広場で開催された左翼の統一集会の詳細

な描写がある。10 万人以上の参会者があり、グレコ、ムルディ、フェラなどのシャンソン歌手たちが歌い、ピエール・モーロワ、ロベール・ファール、共産党のマルシェ、そして最後にミッテランが登場して熱弁を振るう。

われわれにとって少し面白いのは、この間、勝利の象徴である木彫りの鷹が、日本の市長会(l'association des maires japonais)からフランスの左翼統一候補に贈られ、満場の拍手喝采を浴びたというくだりである(P S. 161 頁)。状況から推して、ここは日本の「革新」市長会でなければならず、「de la gauche」がどこかで抜け落ちたのであろうが、それはともかくとして、余談ながら 29 年後の今日、日本に革新市長会なるものは、いまだ存在しているのであろうか。

この場に、小説の主人公フィリップは、行方不明になったリディアの消息を尋ねる過程で知り合ったオランプという女性を伴って、参加している。そこで彼は、AFPでのかつての部下、いまは『レクスプレス』誌の敏腕記者ロベール・トゥーロンと再会、他方、オランプは出版社に勤める友人シャルロットと出会い、ジャンヌ・ラブルブなる女性の小伝を書くことを勧められる。これらの人物との出会いが、サンパウロでのジョン・テルパックとの再会と同じように、物語の進行に必要な歯車の役割を演じるという設定になっている。

次に取り上げられる政治的事件は、ポルトガルでの、いわゆる「カーネーション革命」である。「国軍運動」(MFA)を率いた軍人たちが、36 年間に及ぶサラザールの独裁体制を引き継いだカエターノ政権を倒し、無血革命を成就し、それを民衆がカーネーションを手にして歓迎したのは、1974 年 4 月 25 日のことであった。彼らは政治犯を釈放し、言論の自由を保証し、労組の結成を認めた。驚嘆すべき椿事であった。5 月に結成された臨時政府には、ソアレスやクニャルなど自由を取り戻したばかりの社会党・共産党の指導者も閣僚に加わっていたが、7 月には、MFA の真の指導者バスコ・ゴンサルベスの率いる内閣が登場する。

作者は小説の主人公フィリップに次のように言わせている。「リスボンでは、カエターノ政権が失墜したことで、ともかく現実にはほとんど例を見ない、きわめて稀な、歴史を加速する諸条件ができてしまった。チリでは悲劇的な形で失敗してしまったことが、またサンティアゴでは血の海に埋没してしまったことが、まったく思いもかけぬ形で、しかもは

るかに迅速に、おそらく実現されることになるだろう」と。あるいは又、「ヨーロッパで初めて、民衆による革命的な体制が、その体制に反対する軍隊をというのではなく、体制と共に、体制の中にある軍隊をもつというのは、誇らしいことだ。」とも（P.S. 205 頁）。だからこそ「現実の世界との接触によって、この経過を追体験しなければならないし、歴史について言えば、それが生起し、創られつつある現場で、それを把握することが大切なのだ」（P.S. 204 頁）と考えるフィリップは、74年8月、オランプを伴ってリスボンを訪れている。この小旅行の細部は、「フロランス」と題された章の中の節「1974年8月、リスボンにて」（P.S. 204～211 頁）に詳しい。

次に登場する政治的事件は、上記3件の事件とはやや異なる。というのは、それは新聞紙の第一面を飾るという体のものではなく、どちらかと言えば、ひそかに行われた会談だからである。74年12月5日から7日にかけて、ランブイエで開かれたブレジネフ＝ジスカール・デスタン会談がそれであり、小説の中では、「イリーナ」と題された8番目の章の冒頭で言及されている。イリーナ・ステパノヴァなる女性は、フルシチョフ時代にフィリップが訪ソして知り合った人物であるが、同じくこの会談の取材に来ていた「レクスプレス」誌の旧知のトゥーロンから、彼女が亡命して、いまパリにいることを知らされる。

スターリン批判を行い、米ソ共存路線を進めたフルシチョフが、64年、農業政策の失敗で引退後、あとを引き継いだブレジネフは、フルシチョフの路線を主観主義的偏向として退け、国際的緊張緩和・平和的共存の2原則に立ついわゆる「ブレジネフ路線」を定着しようとして、西側列強の首脳と会談を重ねていた。ジスカール・デスタンとの話し合いも、そのひとつであった。外に向かって緊張緩和・平和共存をうたいながら、逆に、内に対しては締め付けを強めねばならなかったというこの間の事情が、少なからぬ亡命者を生み出す端緒となった。ソルジェニーツインの国外追放が74年2月13日であったことを想起していただく。イリーナという女性のソ連邦脱出という事実を説明するためにも、またこの女性とフィリップとのささやかな情事を描くためにも、この仏ソ首脳会談に触れないわけにはいかなかったのである。

この小説の背景として、その最後の場面に登場するのは、75年4月のサイゴン情勢である。主人公フィリップは4月21日、10日後にホー・チ・

ミン市と改名されることになる町の路上に立っていた。彼は 15 年前、つまり 1960 年にこの町に取材に来たことになっている。因みに、作者レーモン・ジャンは、1955 年から 2 年間、始めはサイゴン大学の教員として、後半は現地フランス大使館の文化アタッシュェとして滞在した経験をもつ。それ故であろうか、ヴェトナムを語る作者の筆致には、余裕と軽快さすら感じられる。解放闘争時代のヴェトナムを描いた旧作『村』(*Le Village*, Albin Michel, 1966) に登場させたスアンという女性の安否を、フィリップに尋ねさせたりもしている。余談ながら、筆者にも 59 年から 1 年間、コロポ計画によって派遣され、日本語教育に携わった経験がある。それが何だ? と問われれば、フィリップのサイゴン再訪の際の町の描写が、通りの名が、場所や建物の具体像が、手にとるように脳裏に浮かぶというだけのことではあるが、タンソンニュット空港から宿泊先のホテル・マジェスティックに着いた彼は、そこで『ワシントン・ポスト』紙の通信員として現地入りしていたテルパックと再会する。

ある夜、昔の知人を訪ねて町を散策したフィリップは、薬物中毒患者と化した少年と、その少年を気遣うフォンという若い娼婦に出会うが、フォンと共に、彼はこの少年を無料診療所まで送り届ける。放置するに忍びがたかったのであろう。ここでも余談を繰り返せば、この時期、作者の次男ローランも薬物中毒に苦しみ、のちに自殺するという悲劇を、レーモン・ジャンは体験している(L. Seuil, 1982 参照)。これを契機として、フォンとフィリップは親密になる。その後、彼はテルパックと共に、臨時革命政府(GRP)のキャンプの探訪者、あるいは 4 月 30 日の民族解放戦線(FLN)の兵士たちのサイゴン入りの目撃者ともなるが、作者は「結局のところ、歴史的事件といえども、大したことはない。たかだか路上を闊歩する兵士たちのパレードに集約されるくらいのものだ」と、眩くようにその印象を語らせている。さらに、なるほど「どこにも血が流されず、現実に戦闘がないということは、とても幸いなことだが、実を言えば、われわれはそれでも戦闘を期待していたのだ... 戦闘はどこで行われていたのだろうか?... 巨大な衝突は... 二つの世界のあの衝突は?... どこにその衝突があったのか?...」(P.S. 331 頁)、とも自問させている。しかし皮肉にもその約 1 時間後、ホテルに近い市役所まで戻ったところで、不意に惹起した銃撃戦に巻き込まれたフィリップは、腹部に流弾を浴びて致命傷を受け、数日後、慌しく死を迎える。彼を最



最後まで看取るのは、テルバックとフォンの2人である。

### III. 主人公をめぐる女性たち

この小説を構成する章が9章から成り、その表題がいずれも女性の名前になっていることは先述したところである。登場順にその名を列記すれば、リディア(43)、ブリジット(42)、オランプⅠ(34)、オランプⅡ(36)、ジャンヌ(10)、フロランス(32)、オランプⅢ(35)、イリーナ(33)、フォン(48) (括弧内は実頁数を示す)となる。

リディアが、73年9月11日のサンティアゴの軍事クーデタに巻き込まれ、その後、行方不明となった女性であることは、繰り返すまでもないであろう。ところで、サンパウロからパリに戻ったフィリップのもとに、一枚の思いもかけぬ写真が届く。それは事件の前日の10日、彼女の案内で訪れたバルパライソの町の高みで撮られた写真で、そこにはリディアとフィリップが肩を並べて写っていた。しかし、差出人の名はない。「切手はごく普通のフランスのもの、消印はこの手紙がアルクイユで投函されたことを示していた」(P.S. 99頁)。そこで、この手紙がチリからパリ在住の誰かに送られ、その誰かがフィリップの住所を知っていて、彼のもとに送り届けたのではないかと考えた彼は、リディアが教えてくれたパリ滞在時代の友人オランプの住所を訪ねる。その場所に、5月革命の時期にはマオイストとして活躍し、学生結婚をしていたオランプは実在したが、いまは離婚し、2児を育てながら、大学に戻りクロード・シモンを研究対象として修士論文に取り組んでいた。

しかし、手紙の一件では、彼女は当事者ではなかった。因みに、この写真の送り主を特定しようとする試みは、小説の題とも関連があり、小説の筋の進行とも絡み合っており、読者の関心をつよく惹きつける。しかし、小説の結末で、亡くなったフィリップのズボンのポケットからリディア、オランプ、その他の女性たちの写真がこぼれ出てくるという描写があるのみで、件の写真の送り主については、最後までそれが明かされることはない。結果的に送り主不明という事実が示された、と言えばそれまでだが、推理小説の読者ならば、いささか物足りなさ、を感じるかもしれない。

折しも、フランスで展開されることになったチリ支援活動に、フィリップは参加し、チリ情勢の報告者のひとりとして種々の集会に出席する。

そういう彼に共感したオランプは、彼と行動を共にするようになり、いつしか2人は愛し合うようになる。この2人の関係は、先述のリスボンへの小旅行まで続くが、何故かその後破綻し、オランプはフィリップのもとを去っていく。失ったものの大きさを知った男は、姿を隠した女を必死に追いかけるが、ついに関係を取り戻すことはできない。

この後にイリーナとのエピソードが来る。旧知のフィリップにとっては、旧ソ連邦の西側に向けた「友好の家」の1職員であり、文学を愛し、詩を書くことを好んだ女性が、トゥーロン記者とのインタビュー記事が「レクスプレス」誌に掲載されるや、著名な亡命女流詩人として一躍脚光を浴びることになる。フランスの左翼は、彼女の支援運動まで始める。フィリップもその運動に参加しながら、それに守られる彼女に多少の違和感を覚えながらも、彼は彼女と1度だけ関係をもつ。しかし、彼女は自分の「回想記」を出す予定の出版社の若い編集者と連れ立ってアメリカへ、最終的な亡命先を求めて旅立っていく。

最後に、この主人公の道連れとなるのは、サイゴンで出会うフォンであるが、彼女については先述したところでもあるので、詳しくは小説の直接の読者に任せることにしよう。いずれにせよ、この小説は、73年のチリの<9・11>に始まり、74年5月のフランス大統領選挙、ポルトガルでの政変、フルシチョフ以後のブレジネフ路線下のソ連邦、最後に15年戦争の幕を閉じる75年4月のサイゴンなどを背景として展開するが、かりにそれらを小説の太い経糸だとすれば、小説の横糸を構成するのは、ここで述べたリディアに始まる女性たちとの、小さな関わりの歴史(=物語)である、と言ってもよいであろう。

ところで、これまで言及しなかった3人の女性たちに、ここで少し触れておきたい。ブリジット、ジャンヌ、フロランスのことである。まずブリジットは、主人公フィリップがサンパウロで再会したテルバックが、トロント在住時代に純愛を捧げた女優、実はストリップティーズということになっている。小説の「語り手」は、毎日のように通いつめるテルバックの様子を、ネルヴァルの「シルヴィ」の冒頭を援用しつつ巧みに描いているが、ある日、この劇場を「ケベック州女性自立運動」(Mouvement féminin autonome québécois[sic])に属する女性のゲリラ隊が襲撃し、舞台の踊り子たちの代わりに男の観客を並ばせ、裸踊りをさせるという椿事を演出する。トロントをその舞台に選んだのは、「男どもに対する意趣

返し、ばかりではなく、英語圏カナダに対する遺恨を晴らすため」(P.S. 87 頁)であるらしい。いずれにせよ、この事件に大きな衝撃を受けたブリジットは、熟考の末、自らもMFAQに加盟して、女性の自立のために渾身の力を捧げる決心をし、舞台からその姿を消してしまう。この女性はストリプティーズから女性闘士への変身物語の主人公なのである。

第 5 章の表題として登場するジャンヌは、この章自体が独立した挿入節として扱われているのだが、ある人物に関する 10 頁ばかりの全文イタリック体で書かれた短い伝記の主人公の名である。詳しくはジャンヌ・ラブブ、あるいはマリ・ラブブとも呼ばれる。1877 年、アリエ県のラパリスに生まれ、1919 年、黒海に臨むオデッサで殺害されたフランス初の女性革命家・ボルシェビキが、この人物である。19 歳まで、アイロンかけ女として働いてきた彼女は、1896 年、一念発起してポーランドに出向く。とあるブルジョワ家庭の家政婦兼子供たちのフランス語教師として。1903 年、彼女はいったんフランスに帰国し教員資格を取ろうとするが失敗、再びポーランドに赴き、私的な形の教員を務める。その間、しだいに革命家たちと交流し始め、1905 年には、ロシアの革命組織に加盟する。その後も活動を続け、1918 年暮、オデッサに入港するフランス軍艦の水兵たちの反乱を指導すべく現地入りするが、密告によって計画は挫折し、自身は捕らえられて、1919 年 3 月、あえなく刑死する。

何故、ここにラブブの小伝が挿入されているのかと言えば、先述した 74 年 4 月 25 日のポルト・ド・ヴェルサイユ広場で開催された左翼の統一集会の場で、オランプが出版社に勤める友人のシャルロットと出会い、彼女からラブブの伝記を書かないかという要請を受けていたことと、それはつながっている。フィリップの勧めもあって、彼女はこの仕事を引き受ける。しかし、なかなか仕事は捗らない。見かねたフィリップは、ある提案をする。自分の知り合いに南仏サンビュックに丸木造りの家、田舎風だが、手入れのいきとどいた家をもつ友人がいる。その人は、いま仕事でモロッコのマラケッシュに出かけて不在であるが、自分が頼めば貸してくれるので、そこで夏の数週間を過ごさないか、そこならラブブの仕事も進むのではないかと。オランプはその持ち主が誰であるかをあまり詮索することもなく、2 人の子供を前夫に託し、この提案を受け入れる。もちろん、フィリップは長期の休暇をとって、この計画を実行する。しかし結局、オランプはこの仕事を完成することがで

きなかった。「ジャンヌ」と題されたこの挿入節は、オランプが書こうとして書けなかった、ひとりの女性革命家の肖像なのである。

ところで、実はその南仏の家の持ち主は、フィリップの<amie>であるフロランス・ブリックであり、その名が第6番目の章の表題となっている。それまでのフィリップと彼女の関係が小説の中で語られることはないが、2人が相互に深い信頼を寄せ合う仲であることは、ほとんどの章に「フィリップからフロランスへ」（または「フィルからフロへ」と題された書簡を内容とする節が設けられていて、いわば、フロランスはフィリップの打ち明け話の聞き役を演じていることから、推察は容易である。しかも、これらの節の存在は、「語り手」の叙述の対象であった事件や人物に対しフィリップがその見解を述べることで、テキストの重層化を実現している。ともあれ、この女性はフィリップの近辺には不在でありながら、<不在の存在>とでも言うべき不思議な存在感を示し続ける人物なのである。

以上述べたように、ブリジットとジャンヌは別として、たえずその周辺に女性との関係を引き摺っているかに見えるこの小説の主人公は、いかなる生い立ちと思想の持ち主なのであろうか。

#### IV. 主人公は村の楽士か？

サンビュックにオランプと滞在中の主人公は、オランプが姿を消したあと、マルセーユに出て幼馴染みのステルン家を訪ねる。ステルンはエックスの大学で文学を講じる教授で、最近フロベールとルイズ・コレの往復書簡集の校訂版を出したという設定になっている。この場面で、作者はその母親の老夫人に、仲のよかったフィリップの母親が「すべてのユダヤ人の母親の例にもれず、息子を溺愛していた」と語らせ、さらに臨終の彼女が、電報を打っても帰ってこない息子について「これが息子の生活ですよ... いたるところ... 世界中に... 女がいるの... 女たちは息子を放しませんよ... 息子は私のところには戻って来ないわ... あの子はとていい子で、とても優しく、とても賢く、とても勇敢... でも、あの子は女を愛しすぎているわ」（P.S. 215～16頁）とも言わせている。

フィリップの中にユダヤの血が半ば流れていることは、作者レーモン・ジャンの場合と同じである。既述したところでもあるが、この主人公は

1973年の時点で47歳という設定になっていたが、逆算すれば1926年生まれとなり、これまた1925年生まれの作者の誕生年とほぼ重なり、この点でも主人公が作者の等身大の投影であることが示されている。この作者は、これ以前に、プラハの春と5月革命を背景とし、「私」を語り手とする小説『二つの春』(*Les Deux Printemps*, Seuil, 1971)を書いているが、その「私」は1927年生まれの大学の歴史学教授という設定になっていた。作者はその人物に、自分は「 Kommunismusに自分たちの希望のきわめて多くの部分を託した世代」(同書, 16頁。イタリック箇所は原文通り。)に属すると語らせているが、フィリップの思想的立場もほぼこれに近いと解してよいであろう。とはいえ、 Kommunismusがこれらの世代の希望に十分に応えたかと言えば、そこには大きな疑問符がつく。68年のチェコ事件後、少なからぬ作家・知識人がフランス共産党を離れたことは周知の事実だからだ。ただし、レーモン・ジャンについて「思想的には左翼的で、共産党員だったが、68年のチェコスロヴァキア事件以後離党した」(『新潮世界文学事典』, 1990, 増補改訂版)とあるのは間違いで、彼の共産党入党はやや意外ながら、この5月革命の渦中に行われていた。

1970年代の後半までの政治との関わりを述べた『 Kommunisteであることの特異さ』(*La Singularité d'être communiste*, Seuil, 1979)の中で、この騒乱の時期、「ある雨降りの木曜日、数人の同志と合流した私は、エックスの市役所前広場で党に加盟した」と書いている。その理由の第1に、当時のドゴール大統領がラジオを通じて共産党を全体主義的集団として非難・威嚇し、知事や警察を動員して対処すると発言したことに反発し、それまで党の「同伴者」(*compagnon de route*)として歩んできた道を、正式な入党という形で、一步前進させることが必要だと考えたことを挙げている。第2の理由としては、この年の1月からチェコで行われてきたことに、社会主義の諸問題を解く鍵・光明があると思ったからだ、とも述べている(同書, 58頁)。しかしその後の彼は、ガブリエル・リュシエ事件、シャルル・ティヨン事件などを通して異議申し立てを行い続け、ために80年代の早い時期に離党することになる。離党するために入党したのではないか、と思わせる程である。レーモン・ジャンの最新の回想記『大地は青い—回想—』(*La Terre est bleue, souvenirs*, La Renaissance du Livre, 2002)によれば、彼はこの時期の彼自身の存在を「同伴者」ではなく、「疑心暗鬼との道連れ」(*compagnon de doute*)ではなかったか、と述懐

している（同書、190頁）。それ程までに60～70年代は、彼にとってさまざまな問題が根底から問い直された時期であった。それを思えば、『記念写真』の主人公フィリップにも、こうした作者の悩みが反映されている、と類推してもよいであろう。

話を少し戻そう。フランス語でいう<coureur de jupons>を日本語に直せば、どうなるのか。女好き、女狂い、女たらし、放蕩者、漁色家などであろうか。筆者の印象によれば、確かにフィリップは女好きではあるが、女狂いでも、女たらしでも放蕩者でもなさそうである。作者はこの小説の冒頭に、「男は女の最良の友」というマックス・エルンストの言葉を掲げているが、フィリップはこれを信念として実行しているようでもある。作者は前掲最新書の中で、彼の父方の祖父が<coureur de jupons>という評判をえていたと書いているが（同書、21頁）、つまるところ、それは自分の血の中に、同じ好みが存在していることへの認知でもであろう。

前掲書『美しい光よ、いとしい理性よ』の中に、「愛と性」と題する章がある。そこで彼は、まず愛や性を語るときには慎みをもってすべきだが、その慎みが偽善であってはならないと述べる。彼自身の基本的な見解としては、「個人の自由があくまで尊重されねばならない分野があるとすれば、それはまさにこの分野だ」と言い、続けてやや慨嘆調に次のようにも書いている。「男女、誰であろうと、その私生活では完全に自由でなければならぬと思うが、現実の社会、習俗はそこから程遠いところに留まっている」、と。さらに続けて、「個人的な見解を言えば、ひとりの男性がひとりの女性を愛しながら、別の女性に欲望を抱くことはありうるし、自分が選んだ女性に忠実でありながら、同時に生きていく過程で、場合によっては amies, copines, camarades, maîtresses, amantes をもつこともできる、というのは今日の常識だと思われる。迂闊にも、いま私は男性の立場で話してしまったので直ちに訂正しておくが、逆に女性の立場であっても、まったくその通りでなければならない」（前掲書、82頁）と付言している。作者のこのような見解を考慮に入れれば、それを認め、共感するか否かは別として、フィリップの行動に理解が及ぶのではあるまいか。因みに、『記念写真』の女性たちもそうだが、上記の見解を共有する女性を主人公として登場させたのが、90年代始めに上梓した小説『女性文化担当官』（*L'Attachée*, Actes Sud, 1993）、だと言えよう。

作者は、主人公フィリップの姓レールマン(Leierman)にもある工夫を施

している。というのも、その姓がシューベルトの『冬の旅』の末尾に登場し、手回しオルガンを演奏する老楽士ライアーマン(Leiermann)に由来することを示唆し、フィリップにそのことをオランプに語らせているからである。「冬の旅」の詩は、ドイツ・ロマン派の詩人ミュラーの手になるもので、失意の若者がさすらいの旅に出て遭遇する出来事や夢を語る、全体として陰鬱な雰囲気覆われたものだ。ライアーマンは、その若者が最後に出会う辻音楽士で、その周辺には胡散臭そうに鼻を鳴らす犬どもが群がるのみで、誰ひとり耳を傾ける人もいない。この人物に若者は、旅を共にすることを申し出る。いずれにせよ、こうした楽士の姿には、音楽を愛することにおいては人後に落ちない「愛好家」<amateur>、と同時に専門家としての技量にはやや欠ける孤独な「アマチュア」、というイメージが重なって見えてくる。

失踪後のオランプからフィリップに電話がかかってくる。「フィリップ、わたしはあなたを深く愛しています。でも、分かって欲しいの。わたしたち、一緒に何かをしようと思えばできていたでしょうし、結婚だってできていたかもしれないわ。けれど、あなたは一度だって、そんなことを考えもしなかった。あなたは記者という職業でも、恋愛でも、とてもディレクタントなのよ。村祭りにやってくるヴァイオリン弾き<ménétrier>、といったところかな？以上、申し上げることはそれだけ。これで、あなたとはお別れします」(P.S. 251頁)。このように述べたオランプは、フィリップの正体を、もっとも的確に見抜いていたのかもしれない。

## V. 結びにかえて

まずこの作品に対する作者自身の見解に耳を傾けよう。彼は前掲回想記の中で「私は仕事を続けた。しかし、その頃準備して、その後出版されることになる小説が、その中に作者としては莫大なものを注ぎこんだにもかかわらず、ほぼ完全に無視されていたことを認めねばならなかった。(…)。その小説の題は「記念写真」、その内容はチリからヴェトナムまで、世界を駆け巡る記者の20年の生きた足跡を語るものであった。失敗。(…)。しかし、私にはこの小説が重要なものであった、これから先もそうあり続ける、という確信がある。ともかく私にとっては、そうである。(…)。いつか読者がこの作品を再発見し、再読してくれることを期待する」(『美しい光よ、いとしい理性よ』、151～152頁)と書いてい

た。

上記のように、作者が「記念写真」を失敗作と認めているのは、どうやら読者の反応がなかったことを意味するようだ。より具体的には、いわゆる文芸批評家たちがこの作品を無視したということであろう。何故、彼らは無視したのか。今日でも、少なくとも筆者には、その原因を特定することは難しい。同じ回想記によれば、1978年から80年にかけてフランス共産党内部でいくつか論争があり、そこでも作者は異議申し立てを続けていて、毀誉褒貶があったことは確かなようである。そのこととの関連は判然としないが、コルシカ出身の作家兼批評家アンジェロ・リナルディの名を挙げて、彼がジャンの小説『裸の川』(*La Rivière nue*, Seuil, 1978)を『レクスプレス』誌の文芸批評欄で酷評した事実に触れ、そこに人格攻撃をも含めた悪意を感じるとまで書いているところを見ると、彼に対する包囲網のようなものが画策されていて、それがこの作品の不評の原因のひとつを形成していた、と作者は感じていたのかもしれない。

しかし、上梓時の反応がいかなるものであったにせよ、2001年の<9・11>を契機として、この作品を再読したひとりの読者としては、この小説を軽々しく失敗作として葬り去ることに、多少の疑問が残る。

まず、作者が多年の努力と集中を重ね、この作品に「莫大なものを注ぎこんだ」というのは、本稿でも説明したように、その通りだと思う。ここには作者のそれまでの経験の多くが、凝縮された形で取り込まれている。作家としては当然の営為であり、それ自体は評価に値する。とはいえ、完成された作品として提示されたものを、読む側がいかに評価するかはまったく別の問題であって、そのことは作者自身も知悉しているところであろう。筆者にしても、例えばオランプという女性の原型はガブリエル・リュシエではないか、しかし『裸の川』のジュリアもそうではなかったか、類型の繰り返しは少し安易ではないか、という印象がなくはない。あるいは又、博識の作者ならではの「引用」や「挿入」にも、『村』、『二つの春』におけるよりは改善が見られるとはいえ、率直に言えば、多少の違和感を禁じえない箇所も散見される。さらに言えば、サンティアゴ、リスボン、サイゴン等の情況説明のために用いられた各種組織・政党などの略字の類発は、フランス人読者ですら、戸惑うこともあるのではないかと、とも思う。

しかし、全体としてこの小説は面白いのかと問われれば、筆者は躊躇な



くそれを肯定する。筋の進行、人物の配置、事件との関連にも工夫が凝らされている。ユーモアもある。もちろん、主人公フィリップの政治的立場、その愛や性をめぐる見解、さらにはその生き方そのものに賛同できないという読者もいるだろう。それは当然であって、少しも不思議ではない。そのような人物論の詳細は別の機会に譲るとして、いま筆者がとくに興味深く思うのは、1981年のミッテランの勝利を前にした70年代の、左翼を自認していたひとりの知識人作家が、歴史の進行・展開に無関心でおれない女好きの主人公を通して、描いて見せた世界史の略図なのである。

ソ連邦が崩壊し、ベルリンの壁が崩れ落ち、2極競合から1極支配の時代に移り変わった21世紀初頭の今日から見ると、つまりは右も左も西も東も多くの愚行・蛮行を犯したことが明白な現在の視点に立つと、左右の対立、東西の激突に一喜一憂した60～70年代の歴史は、いったい何であったのか、が問い直されてくる。さらに敷衍して言えば、『記念写真』に描かれた時代、つまりチリの<9・11>と、ニューヨークのそれとのあいだに何があったのか、何かが改善されたのか、それとも何も変わらなかったのか、を真摯に問い直すことにもつながるであろう。

いずれにせよ、1980年に刊行されたこの作品は、いまだ Kommunismus に多少の希望を託し続けた作家が、『村』、『二つの春』の延長上の作品として構想した長編小説であった。繰り返しをいとわずに言えば、『村』ではヴェトナム解放闘争の意味を、『二つの春』ではドブチュクに代表される人間の顔をした社会主義への試みの意味を、それぞれの状況と、その中に生きる人物を描くことによって問うものであった。『記念写真』では、複数の事件が扱われ、その場面もチリからヴェトナムにまで拡大された。そこに作者の自信と野心をうかがわせる何かがあったのではないか。しかし残念ながら、読者の反応が乏しかったという理由で、この自信作を失敗作と認めた作者は、以後作風を大きく改め、その作品の多くを南仏の書肆アクト・シュドに移して出版することにもなる。その辺の事情については、機会があればいずれ後日、稿を改めて書くことにしたい。

## Relire *Photo souvenir* de Raymond JEAN (Seuil, 1980)

Tsuyoshi SUGIYAMA

Le “11 septembre” de New York m’a immédiatement rappelé celui de Santiago en 1973. Quelle étrange coïncidence! Pourtant l’idée m’est venue ensuite que ce putsch avait été raconté dans un roman de Raymond JEAN, qui s’appelait *Photo souvenir*. C’est pourquoi j’ai commencé tout de suite à le relire.

Des événements politiques et historiques, tels que le coup d’état militaire de Pinochet, l’élection présidentielle en France de 1974, la révolution des œillets au Portugal et enfin la chute de Saïgon au mois d’avril de 1975, constituent l’arrière-plan du roman. La chaîne du roman, autrement dit. Philippe Leierman, journaliste à l’AFP, héros du roman, célibataire à l’âge de 47 ans, se trouve toujours près de ces événements, les observe d’une façon attentive et personnelle et se limite à ne raconter que ce qu’il voit.

La trame du roman, c’est l’histoire des relations avec les femmes que rencontre Philippe sur le chemin de son existence, telles que Lidia, Olympe, Florence, Irina et Phuong. Philippe, est-il coureur de jupons? Un peu oui. Mais l’auteur voudrait le désigner comme meilleur ami de la femme ou bien comme “ménétrier”, musicien de fêtes villageoises, ainsi que l’a nommé Olympe dans le roman.

D’après l’auteur, ce livre “rencontrait un silence assez généralisé” au moment de sa parution en 1980. Je ne peux pas en préciser la raison. Il dit aussi qu’il “garde la conviction intime que ce livre était important, qu’il l’est toujours” (cf. *Belle clarté, Chère raison*, 1985). En tant que lecteur qui ai essayé une deuxième lecture du livre, je le trouve intéressant et important. Au moins en ce sens qu’il nous pousse à penser à ce qui s’est passé dans le monde entier entre les deux “11 septembre”. Ne faudrait-il pas le tirer, tant soit peu, de l’oubli?